

京都大 中村秀仁助教が主導「Nプロ」

自らのいじめ体験、声を失った地への回帰

いじめ問題をテーマとした講演会が7月28日、大阪府吹田市内で開催された。登壇したのは、科学を通じて社会との対話を図る「Nプロジェクト」(通称…Nプロ)を主導する、京都大学の中村秀仁助教。会場には、春藤尚久副市長をはじめ、奥下剛光衆院議員、井口直美市議、井上真佐美市議、林やすひろ市議ら行政・政界関係者が自ら会場に足を運んだほか、教員95人(小学校71人、中学校24人)を含む計155人が参加し、熱心に耳を傾けた。中村助教にとって今回の舞台となったその

校区は、中学校時代に壮絶ないじめを受け、学校など特定の社会的状況で話せなくなる状態に陥る契機となった、いわば「いじめの爆心地」そのものであった。進学先の高校で3年間にわたり、早朝6時から絶え間なく続けられた教員との対話によって自らの「声」を取り戻した歩みを紹介。中学校時代の想像を絶する凄惨な体験が語られると、多くの参加者が一斉に涙を拭いた。この原体験こそが「対話」を重視するNプロの構想へと繋がったと明かし、表裏にA/Bと記された用紙を参加者全員が掲げるなど、会場を一体化させる演出を用いながら、2時間に及ぶ講演を完了した。

実際、Nプロがもたらす教育効果は驚異的だ。昨年、文部科学省内で行われた記者会見では、Nプロ参画まで家庭外で話すのが苦手だったという高校生も登壇した。メディアが集う極限の緊張感の中で、社会へ向けて堂々と発信する姿が確かにあった。中村助教は「社会の皆さまからの賞賛が、高校生の承認欲求を満たし、自己肯定感へと変わっていくその成長の姿が、保守的とも言われている教育現場でさえも動かす」と語る。かつて声を失い、対話によって救われた一人の研究者が導き出した答えは明快であった。その訴えに応えるべく、会場に集まった教員からは自校におけるNプロの受入れ表明が相次いだという。



A/Bと記された用紙を掲げる教師ら。
会場の景色がガラリと変わる瞬間



中村助教⑤と春藤副市長

失い、対話によって救われた一人の研究者が導き出した答えは明快であった。その訴えに応えるべく、会場に集まった教員からは自校におけるNプロの受入れ表明が相次いだという。